

〔三餘清事六〕女人鞦韆

若夫鬪鷄而芥其羽、金其距、又鬪蟋蟀、有場、盛之有器、餉之以黃豆糜、必大小相配、兩家審視數回、然後登場、決勝負、其健而善鬪者、號將軍、或號大將軍、死以金棺盛之、將軍以銀瘞之、原得之所、甚者或至有破其家產者、日本亦有此等戲、而未嘗至於如是之愚癡迷惑、蓋日本人氣格高古、自無此等童心兒習焉耳、

〔三代實錄陽成四十一〕元慶六年二月廿八日辛丑、天皇於弘徽殿前覽鬪鷄、

〔日本紀略朱雀二卷〕天慶元年三月四日、於御前有鬪雞事、十番爲限、

〔日本紀略花山〕寛和二年三月七日乙亥、東宮有鬪雞事、八十番

〔榮花物語初花〕寛弘三年になりぬ、略○中三月ばかり花山院には、五六宮をもてはやしきこえさせ給とて、とりあはせせさせ給てみせたてまつらせたまふ、おやはらの五のみや登昭をば、いみぢうあいしおぼしむすめばらの六宮仁清をばことほかにぞおぼされける、かゝる程に世の中の京わらはべ、かたりき、てとりぐの、ゑる、人の國までゆきて、いさかひの、ゑりけり、かゝるいまめく事どもを、殿道長藤原きこしめして、かいひそめて、おはしますこそよけれ、いでやとおぼしき、奉らせ給ふ程に、院のうちの有様をきて給ふ事ども、いとおどろくゝ、まういみじ、その日に成ぬれば、左右の樂屋つくりて、さまぐの樂舞など、のへさせ給へり、との、君たちおはすべう御せうそくあれば、みなまいり給、さるべき殿ばらなどもまいりたまふて、いまは事どもなりぬるきはに、このとりの左のまきりにまけ、右のみかつに、むげに物はらだ、まう心やましうおぼされて、たゝむつかりにむつからせ給へば、見き、給人々も、心のうちおかしうおぼしみ奉りたまひけり、左萬におぼえむつかりて、ことなる物のはへなくて、それにけり、いとこそおかしかりけれ、